

『仙台学』と嶋屋書店——被災地の出版人

「被災地・大槌町に書店誕生：「一頁堂書店」に未来あれ」——文化通信編集長の星野渉氏が、asahi.comで、町長以下、復興を担うべきリーダーの多くが亡くなるという大きな被害を受けた岩手県大槌町で、昨年末、被災後唯一となる書店がオープンしたことを、紹介されています。

<http://www.asahi.com/digital/mediareport/TKY201201090085.html>

関西で活動する大学出版部にとって、被災地で、本が、書店が人々を支えた、という事実を初めて体験したのは、1995年1月17日の阪神大震災の時でした。阪神震災からちょうど17年、東日本大震災からあと二月で1年。私たち出版の営みが、誰のためにあるのか、誰に支えられてるのか、今一度、思い起こしてみたいと思います。

以下の雑文は、昨年5月、仙台と塩釜を訪れた時のレポートです。大学出版部の関係者の皆さんにのみお配りしたのですが、星野さんの記事を拝見し、AJUPのホームページをご覧になる皆さんにもご笑覧いただきたく、掲載しました。

鈴木哲也（京都大学学術出版会／大学出版部協会関西支部長）

『仙台学』と嶋屋書店——被災地の出版人

鈴木哲也（京都大学学術出版会）

5月10日（火）9時56分、初夏の、と言うよりまるで梅雨のような蒸し暑さの中、「はやて」123号で仙台に向かう。東京は今にも降り出しそうな雲行きだったが、那須塩原を過ぎる頃には青空が見え、D席（進行方向左側）に座る私の車窓には、頂上に雪が残る那須岳が、新緑に輝いている。景色は爽やかだが、ここから数十キロ東には、原発事故で住民が帰れない町があると思うと、心は晴れない。反対側、A席に座った老女が、ハンカチを握ったまま、ずっと遠く東の彼方を眺めているのが気になった。

郡山に近づく頃から、屋根にブルーシートをかけた家が多くなる。阪神震災の時、車窓から見た阪急沿線の街の記憶がよみがえる。あのときは倒壊した建物も多く、そんな中に屋根の被害だけでした住宅が残っている、という印象だったが、今回の震災では、

揺れで倒れた建物は少なかったと聞く。揺れの質も違ったようだが、17年の耐震技術の進歩もあるのだろう。確かに、駅周辺に立ち並ぶタイル葺きの新建築の住宅には、すくなくとも外観からは被害は感じられず、所々に残る旧家の屋根にのみ、シートがかかっている。東北新幹線沿線で最も揺れの強かったのは、郡山から福島にかけてだったのだろうか、福島を過ぎるとシートが目立つ家は急速に減っていく。ほどなく到着した仙台駅は、地震後二ヶ月を経て、一見、何事もなかったかのように見えた。

駅前で昼食を済ませ、東北大学出版会を訪ねる。何の事前連絡もなしに訪問したにもかかわらず、阿部さん、小林さんに歓待され話を伺う。幸い、スタッフ全員、ご家族ご親族皆さん無事、さらに、出版会事務所も大きな被害は受けなかったとのこと。復旧処理のご苦勞をねぎらうつもりが、コンテンツの分割販売（最近、ある大学からそのような依頼があったとのこと）や電子出版等について意見を求められるなど、平常業務そのものと言ってよい、元気な活動ぶりに安心する。

しかし、東北大学全体で見ると建物被害等は深刻で、実験設備等の倒壊で研究・教育を再開できない自然科学系の学部、屋上の水タンクの崩壊で資料や書籍が水浸しになった人文系学部の例など、全学で被害額は800億円に上る見通しだとか。書籍資料の支援など、復旧に向けて我々がなすべき支援も大きいと感じる。出版会に直接影響したのは、印刷所の被害だそう。オフセット印刷（平版印刷）というのは、その名の通り、印刷機の水平設置が要求されるわけだが、地震によって、その水平が保てない工場も多く、しかも印刷機械のメンテナンスというのは全国的にも人員が限られるのだそう。そのため、印刷所の復旧が遅れ、新刊の発行に影響したとのこと。出版と被災の問題は後に書くが、ご苦勞が偲ばれた。

出版会業務以外にも、地震直後の生活の困難に関する話を色々と聞く。印象的だったのは、阪神震災のときもそうだったが、被災者自身は被災の全体像をつかめないということ。停電でテレビが見られない中、仙台市内でも、わずか数キロ東の沿岸部で何が起きているのか全く知らず、3～4日の後、ようやくテレビがついて皆息をのんだという。昨年の編集部会秋季研修会以来、協会メンバーにもなじみ深くなった東北の出版集団、荒蝦夷が緊急に出版した『仙台学』（11号 震災特集）にも、「空港が津波でやられたらしい」「ガスタンクも爆発しそう」といった、「噂」が人々の間で語られた、という描写がある。

その『仙台学』11号にまつわる話こそ、拙稿のタイトルであり、今回の仙台訪問で最も感動を覚えたエピソードである。

震災での書店被害については、すでに書協などから速報が届いている。しかし、揺れや津波による被害といった、直接的な大規模な被害はわかりやすいのだが、今回のような国土の数分の一におよぶ大被災体験のない者にとって想像しにくいのが、新刊が入っ

てこない、という書店の苦悩だ。仮に建物や人が持ちこたえたとして、書店が営業を再開する場合、売れる商品が無くてはいかんともしようがない。言うまでもなく、今日の業界構造の中では、書店にとって新刊こそ、営業の命だ。それが一切入ってこないのである。そんな中、荒蝦夷や河北新報社が、速報誌（上記『仙台学』）やグラフ誌（『巨大津波が襲った—3.11 大震災』河北新報出版センター）を緊急に発行し書店に出荷した。それらの新刊が、飛ぶように売れ読者が列を作っている、という。

そうした小林さんの話に、阪神震災のとき、数多のビルが倒壊した三宮で震災数日で営業を再開したジュンク堂三宮店の話を思い出し、書店を訪ねてみることにして、出版会を辞す。

書籍贈呈などの支援を考える上で、中等学校の被害の話を伺いたいと思い県庁を訪ねるが、さすがにアポなしでは要領を得ず退散。さてその足で書店へと思うが、どこにするか？ 思い浮かんだのが、東大出版会竹中さんのレポートにあった、塩釜の書店だった。そこで、仙台近郊の津波被害地域を走る仙石線に乗る。仙石線は、字の如く仙台と石巻を結んでいるが、塩釜港から石巻にかけては線路が津波に流されてしまった。したがって運転は東塩釜まで、その先はバスが代行している。仙台地下駅を 16 時 3 分発、ちょうど高校生の帰宅時で、日本中どこへ行っても彼らの乗る電車はやかましいが、さすがに会話の中には、「津波」という言葉が何度も聞こえる。

地下トンネルから出てしばらく、よくある大都市沿線の風景をぼんやりと眺めていたのだが、多賀城駅到着のアナウンスと同時に、ギョッとする光景が目飛び込んできた。津波が遡上したのだろうか、線路脇に並ぶ住宅の裏を流れる小さな川の土手^{注1)}に、大破した白いワゴンが、川に頭を突っ込むようにして放置されている。地震後二ヶ月がたち、がれきの片付けは進んでいるようで、無残に大破した車が転がっているという（ニュースでさんざん見せつけられた）光景は、その後はほとんど見なかった。それだけに生々しく、写真を構えることが出来ない。

^{注1)} このときは川かと思ったが、実際には、東北本線から仙台港に伸びる貨物線の線路だと後に聞いた。がれきや砂が路床を覆い、一見、線路とは見えなかった。事実、この線路から東側は、仙石線の線路を越えて内陸部まで津波が襲い、大きな被害を出したという。

駅前に自衛隊のテントが並ぶ（沖縄から派遣された陸上自衛隊の部隊が、入浴サービスを行っているという）多賀城を過ぎ、いよいよ、津波被害地のただ中へ入る。このあたりの仙石線は高架になっていて、かろうじて線路は保たれているが、高架から見下ろすのは、まさしく津波に洗われた街だ。

終点の東塩釜で下車、本塩釜駅までの道を引き返す。ニュースで見たようながれきの山は見えないが、それでも港に沿った幹線道路の歩道に小舟が放置されている（写真1）。

風に舞い上がったほこりで眼が痛い。さらに広大な更地があちこち目につき(写真2), その間にぼつりぼつりと、一階部分が潰れた建物が残っている(写真3)。全壊した建物やそのがれきはすっかり撤去され, 半壊の建物だけが残っているのだ。持ち主と思われる人が, ぼんやりと座り込んでいる姿も見える。カメラを向けるのもはばかり, とぼとぼと歩く。ところどころ歩道の舗装がめくれ上がり, そうしたところは決まって水たまりがある。



写真1



写真2



写真3

本塩釜の駅で, このあたりの津波の様子をニュースで見たことがあるのに気づいた。その映像は, 今, **You Tube** に載っている。

http://www.youtube.com/watch?v=ZuAhx_ZYcvE

この動画で, 海側を写した場面, 眼下に見えるのがスーパーマーケットのマックスバリュで, 本塩釜のまさに駅前。動画を見ての通りだが, 一階は完全に破壊されて今も人気がない。ところが, その駅前ロータリーを隔てた反対側で, 書店が一軒, 営業をしている! (写真4)



写真 4

嶋屋書店。竹中さんのレポートでも、書店があることは読んでいた。しかし、まさか、この津波に晒された店だったとは。上記の動画にも、まさに津波がこの店を襲おうとしている場面が写っている。駅前の路面からは、ほんの少し、1メートルはないと思うが路面が高くなっていて、そこに書店の入ったビルがある。この僅かな高さが、完全に店が水に浸かるのを助けたらしい。店内は綺麗に整備されて、一見するだけでは、津波をかぶったようには見えない。帰りの電車の時間まで10分、レジで立ち話をする。阪神震災のジュンク堂の話もするが、あのときと違うのは、本が水に浸かっては、商品にならないということ。にもかかわらず、そうした本を片付ける最中から、お客さんが来たのだという。店を清掃し、濡れずに残った商品を並べて営業再開したのは、地震のわずか2週間後だという。被災の中でも、ろくに商品が無くても、本を求めて来る人々。そこに『仙台学』が入荷して、競ってそれを求める。そうした人に、我々は支えられているのだ。

津波の直後、教え子の安否を確認しながら、生徒たちを励ますために、本を配って避難所を訪問する中学の先生の様子が、ニュースで紹介されていた。「君は歴史が好きだよね」と言って渡される本を受け取った男の子が、ちょこんと頭を下げて、ほんの少しほほえんだのが印象的だった。実は、その子は親御さんが行方不明なのだという。そして、この嶋屋書店と、そこに足を運ぶ人々。私が本を選んでいる僅かな間にも、数人の人がレジに並んだ。こう言うと失礼だが、小さな漁港の本屋さんである。本が、確かに癒しや支えになっているのだ、と確信した。

すでに時間は18時前、今日中に東京に帰らねばならない。何か出来ることがあれば連絡して欲しい、と急ぎ名刺を渡して駅に向かう。もう15年も前になろうか、やはり出張の帰り際、そのときは仙台空港への時間を気にしながら、塩釜で海の幸をほおぼった記憶があるが、その港の市場も食堂も無くなってしまった。仙台駅で、発車間際の「やまびご」に駅弁を買って飛び込み、18時42分発。品川のホテルに戻った時には、時

計は10時近くを指していた。